

か説清 ら 末 87 小

2007.10.1

魯迅による林紓冤罪事件樽本照雄 1
 《亞森羅蘋之勁敵》と《竊鑄案》の原作
渡辺浩司20
 近代翻譯文學家陳鴻壁女士生平考...李 勇27
 晚清小説作者掃描(拾貳)武 禧30
 清末小説から26,30,32 『清末小説』第30号は
 近日発行予定です。樽本著『林紓冤罪事件簿』
 も刊行されます。文学革命に反対したとして長
 年にわたり批判されつづけてきた林紓です。し
 かし、視点を林紓の側に移動させると違った風
 景が出現します。武力で北京大學に圧力をかけ
 たといわれる林紓はどこにもいません。不思議

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

魯迅による林紓冤罪事件 「引車売漿者流」をめぐる

樽本照雄

魯迅から山上正義にあてた日本語の手紙(1931年3月3日付)がある。「阿Q正伝」について魯迅自らが注をつけたものだ。珍しいし、なによりもその注釈が詳しい。発掘者である丸山昇の解説がついて日本で公表された時は話題になった。魯迅著、丸山昇解説「《未発表書簡》『阿

Q正伝』日本語訳について」(『海』1975年9月号1975.9.1)という。

今、その雑誌を取り出してみる。発行年月日に目をやれば、中国では「文化大革命」がまだ継続中のころである。雑誌の周囲が黄ばんで経年ヤケというのか、30年以上もたっていることにいまさらながら驚く。

その「引車売漿者流」についての魯迅自身による説明は、研究者には従来知られていない事柄だった。今でも私はおぼえている。その手紙について話をしていた時、ひとりが、批判するにも父親の職業を持ち出すかね、エゲツない林紓やねえ、と発言した。私も含めて、皆が賛同したものだ。

林紓に関係する魯迅の自注は、2カ所ある。「阿Q正伝」の冒頭部分にでてくる。

『博徒別伝』の誤解

雑誌の紙面上に魯迅の手紙(日本語)原文があり、下に丸山の解説がつく。引用する。(「」はコトに書き換えた)

3.(林琴南氏ハ嘗テコナン・ドイルノ小説ヲ訳シテ『博徒別伝』ト云フ名ヲツケタ、ココニハ、ソノコトヲ諷刺シテ居ル。ヂッケンスト有ルハ、作者ノ誤。)*¹

「ここは疑問の残るところである」と丸山は書いている。「コナン・ドイルのRodney Stone『博徒別伝』は商務印書館出版の「説部叢書」の一冊で、陳大鐙^{ママ}訳、という。林琴南が『博徒別伝』と訳したという魯迅の言葉は何によったものか」*²丸山の疑問も当然である。

『(社会小説)博徒別伝』巻上下全21章1冊には、(英)柯南達利原著、陳大燈、陳家麟同訳だと明記してある。上海商務印書館(戊申九月十四日(1908.10.8)/1915.10.18再版)から出版された「説部叢書」2集第59編の表示もある。林紓の翻訳では、ない。

丸山は、「魯迅の思いちがいということも考えられる。もしそうだとすれば、魯迅の林琴南に対する気持ちのなせるわざかも知れない」と説明する。

1924年に林紓は死去した。山上あての手紙は、それから数えて7年後のことだ。『博徒別伝』の発行が1908年だから、それからすればもっと時間が経過している。だから勘違いしたのか。あるいは、それ

くらいの時間の経過はなにほどのこともなく、林紓に対して、諷刺する考えが魯迅に持続していたか。その両方だろう。それが、丸山のいう「魯迅の林琴南に対する気持ちのなせるわざかも知れない」の内容だと思う。平たくいえば、魯迅は林紓を批判的に見ていたということだ。その見方も、長期間にわたって続いている。

しかし、該翻訳書は、林紓の翻訳ではないし、また、ディケンズの著作とも違う。いくら林紓を嫌っていたからといって、二重の勘違いでは諷刺にはならない。魯迅は、間違っていると認めているが、それはディケンズの部分だけであるところに注目されたい。林紓の翻訳だと思いきんでおり、こちらを訂正することには気づいていない。

魯迅から教えられた山上正義は、該当部分を以下のように翻訳している。関係する注もあげておく。

コナンドイルは博徒別伝^{註一}なる一書を著してゐるといふ様な例がないでもない。*³

註一 この小説発表当時、林琴南氏がコナンドイルの某探偵小説を訳して『博徒別伝』^{ママ}としたのを皮肉つたもの。原著にはヂッケンズとなつてゐるが、これは作者の間違ひで後日訂正した。*⁴

著者が直接書いてきたことだから山上は自分で調べようとはしなかった。だか

ら、林紘の翻訳だと記し、さらに書名を『博徒列伝』と誤記している。ただし、書名については本文の方の表記は正しいから、単なる誤植かもしれない。さらに、「コナンドイルの某探偵小説」と書いて、これまた間違う。ドイルならシャーロック・ホームズものだと思ってもおかしくはないにしてもだ。

なにしろ、もともと林紘の翻訳ではないのだから、これでは注釈にはならない。知っている人が見れば、どこが林紘諷刺かと怪訝に思うだろう。

つぎが例の「引車売漿者流」に関する興味深い注釈だ。

「引車売漿者流」についての魯迅自注

小説「阿Q正伝」において、著者が阿Qの伝記を書くことになった経緯を説明する。自分の文章についてこう記す。

但從我的文章着想，因為文体卑下，是「引車売漿者流」所用的話
然し私の文章から見れば、文体が下等で「引車売漿者流」の使用する言葉である。*5

上の日本語訳は増田渉である。特に増田訳をあげたのは、周知のように彼は魯迅に直接教えを受けているからだ。ただ、肝心の「引車売漿者流」は、原文のままですまして注釈もない。最初は原文を理解しなかった可能性もある。のちの翻訳には手を加えている。

しかし私の文章から考えて、文体が下品で「車を引っぱって味噌を売り歩く手あい」の使用する言葉（割注：当時、口語体の文章を悪罵して文語体の文章を上等なものとする一派がそうだった）であるから*6

漢語の「漿」を「味噌」と意識したのは、豆乳では日本人にはなじみがないと思ったのか。あるいは同音の「醬」と勘違いしたのかもしれない。その増田にして「一派」というだけで林紘の名前をださない。一般読者を対象とした出版物だから不必要だと判断したものかどうかまではわからない。

ついでだから1937年の日本語訳と注を見る。

しかし、私の文章から見ると、文体が下卑てみて、ポテ〔註二〕売などの使ひさうな言葉だから

〔註二〕原文「引車売漿者流」む古文の大家林琴南が、民国八年三月北京大学校長蔡元培に宛て、白話反対の手紙を書いた。その中に用ゐられた句。*7

「ポテ売」は、現在では死語になっている。辞書を見れば「ぼて振り〔棒手振〕」があって、てんびん棒でかついで売り歩く人だと説明する。「ポテ売」はここから来ているとわかる。なにを売るのが問題ではなく、店舗をかまえることのできない零細な商売の形態であるという

理解による。注では、蔡元培あての手紙に見える林紓の使用した句だと説明するのが、この時点で新しい。それを示すため原文に引用符を使用している。

従来は、林紓が書いたものを魯迅は逆利用して皮肉った、と説明するのが普通であった。それ以上の意味が込められていようとは、思いもしない。ましてや、蔡元培の父親に関係するとは「意表之外」である。だから1975年に出現した魯迅の自注は研究者の注目をあつめた。

丸山の注とともに引用する。

4 .(コンナコトハ林琴南氏ガ白話ヲ攻撃シタ時ノ文章中ニ有ル話シ。)
 (『引車売漿』トハ、車ヲ引イキ豆腐漿ヲ売ルコト、蔡元培氏ノ父ヲ指ス。アノ時、蔡氏ハ北京大学校長デ矢張白話ヲ主張シター人デ、故ニ、矢張、攻撃ノ矢ヲ受ケル。)

4 . 山上氏宅で私が初めてこの「注」を見た時、最初に驚いたのはこの一条だった。この言葉はここにもあるように、文学革命当時、蔡元培にあてた手紙の中にある言葉で、魯迅がそれを逆手にとったものであることは周知のことだったが、林琴南がそれをいった時、一般的に庶民の言葉である白話を軽蔑して使っただけでなく、「蔡元培氏の父」にあてこすっていたこと、少なくとも魯迅がそう受け取っていたことはまったく新しく知った事実である。しかし、進士で翰林院にも入った蔡元培の父

親がまさか「引車売漿」そのものではあるまいと思って調べてみると、父親は錢莊(昔の金融機関)の「經理」(支配人)で、二叔も呉服屋の經理、四叔、五叔、七叔もみな同様に、一族がほとんど商業に従事している。六叔が科挙に合格したのが最初で、それまでは科挙の合格者は一族から出ていない。林琴南はそういう蔡元培の「家柄」をあてこすったのだということになる。たがいにそこまで知り、意識して論争していたのが当時の中国の文化界の空気だったわけで、すさまじいとしかいいようがない。(後略)

丸山の感じた驚きが伝わってくる文章だと私は思う。魯迅の説明を読んだ人は、「引車売漿」ということばに蔡元培の父親をあてこすった林紓の底意地の悪さを同時に理解したはずだ。人身攻撃だという中国の研究者もいる*8。

一方で、魯迅から注釈の手紙をもらった山上の翻訳はどうかと見れば、「私の文章から見ると、この文体の卑俗なことは、恰も八百屋の小僧か酒屋の御用聞きでも使ひさうな言葉ばかりであつて」(12頁)となる。注すらなく、ここには林紓も蔡元培も出てこない。なにか肩すかしをくったような気がする。

さて、丸山によってこの手紙が公表されて以後、「引車売漿者流」についての解釈は、魯迅自身による注釈が定着することになった。すなわち、「引車売漿者流」

は、蔡元培の父親をあてこすり、皮肉るために林紓が使用したことばである、ということだ。なにを当たり前のことを説明しているか、と思われるだろう。だが、このなんでもないように見える箇所理解の分かれ目がある。すなわち、魯迅の理解は、そのまま林紓が意図したことになるのか、というごく当たり前の疑問だ。

丸山は、彼自身の翻訳では「阿Q正伝」の該当部分を、「私の文章から考えると、文体が卑しく、「車を引いて豆乳を売り歩くやから*」の使う言葉だから」と訳している。その注に次のように書く。

「車を引いて豆乳を売り歩くやから」 原文「引車売漿者流」、これについて、魯迅は「手紙」(解説参照) でこう書いている。「こんなことは林琴南氏が白話(口語) を攻撃した時の文章中にある話。『引車売漿』とは、車を引いて豆腐漿を売ること、蔡元培氏の父を指す。あの時、蔡氏は北京大学校長で矢張白話を主張した一人で、故に、やはり、攻撃の矢を受ける。これにあるように、文学革命当時、保守派の文人林琴南が蔡元培を非難した手紙に出てくる言葉であることは、従来も知られていたが、林琴南の言葉が、蔡元培の父をあてこすったものであったことは、魯迅の「手紙」によって初めて明らかになった。蔡元培の父は錢莊(昔の金融業) の支配人で、一族も多くが商業にたずさわっていた。林琴南は

蔡元培が学者としては「家柄」がよくないことをあてこすっていたわけである。*9

丸山は、「林琴南は蔡元培が学者としては「家柄」がよくないことをあてこすっていた」と重ねて説明する。「家柄」の前に「学者としては」と新しくつけ加えたのには理由がある(後述)。魯迅の自注を手がかりにして文章を読み解くという丸山の姿勢に変化はない。ただ、「少なくとも魯迅がそう受け取っていた」は省略した。この丸山の説明に彼の慎重さが表われているのだが、解説文では必要がないと判断されたのかもしれない。しかし、ここが先に私が触れた問題に連なる重要な部分なのだ。

その後の注釈をいちいち引用するのはわずらわしい。竹内好と1982年版『魯迅全集』のふたつで代表させたい。

ふたつの注釈

まず竹内好から。注釈の関係する箇所のみを引用する。

(4) 原文は「引車売漿者流」一九一九年、文学革命に反対して林紓が蔡元培あてに詰問状を書き、蔡がこれに答える一幕があった。そのとき林が口語文のことを「引車売漿之徒」のあやつるものと嘲弄した。車を引いて豆乳を売る(旧訳に車ひきや行商人としたのは誤り) 小商人の意で、蔡元培の家系が商人であることへの

当てこすりだと魯迅は林守仁(山上正義)の問いに答えている。(後略)*10

竹内の注が魯迅の山上正義あての手紙によっていることが明示されている。だから、竹内は自らの旧訳もここで訂正したわけだ。魯迅本人がそう説明しているのだから無視するわけにはいかない。「蔡元培の家系が商人」の部分は丸山昇の説明を取り入れたとわかる。そういう経緯で上のような注釈になる。

中国の1982年版『魯迅全集』の注にはこうある。翻訳する(訳者名のあるもの以外は樽本訳)。

〔 8 〕“ 引車売漿者流 ” これは当時林琴南が白話文を攻撃した用語である。本巻190頁注〔 27 〕を参照のこと。1931年3月3日に作者が日本の山上正義にあてた注釈の中で「『引車売漿』とは、車を引いて豆腐漿を売ること、蔡元培氏の父を指す。あの時、蔡氏は北京大学校長で矢張白話を主張した一人で、故に、矢張、攻撃の矢を受ける」と書いている。*11

そこで190頁注〔 27 〕を見る。「論照相之類」(1925発表)にも同じ語句が出てくる。

〔 27 〕“ 引車売漿者流 ”之文字 林琴南が1919年3月に蔡元培にあてた手紙のなかで白話文を攻撃してつぎのようにいっている。「もしすべての古

書を廃し、卑俗なことばを用いて文章を作るならば、北京の車を引いて豆乳を売る輩が操っていることばはいずれも文法がありますから、……そうであれば、北京天津の小商人はだれでも教授に採用できることになります」*12

こちらには、蔡元培の父親はでてこない。だが、全集注釈の説明を見れば、両者は一体のものとして理解できる。

魯迅の山上あて自注、およびそれ以後の注釈を読んで次のことがわかる。林紓が蔡元培の父親を引き合いにだして、蔡を批判、あるいは諷刺、当てこすっている事実がある。現在、そのように理解されている。

魯迅から見た林紓

『博徒別伝』は林紓の翻訳ではないにもかかわらず、また原著者を間違っているにもかかわらず、魯迅はわざわざ持ち出して林紓を諷刺する意図だと説明している。明らかに魯迅の思い違いである。林紓にしてみれば、自分の翻訳ではないのだから唐突につきつけられた言いがかりにほかならない。

林紓が蔡元培にあてた手紙に「引車売漿」とあるのを取り出して、魯迅は、林紓が蔡元培の父親を指すと注釈をつける。魯迅が学生時代、出版されると購入して読んだ林訳小説の著者林紓の姿は、ここにはどこにも存在しない。もっとも、翻訳本とその翻訳者は直接の関係がないと

いえばそうだ。文学革命の反対者として出現した林紓を、魯迅は批判的に見るようになったということなのだろう。

その林訳小説にしても、のちに魯迅が回想するところでは、評価は高くない。

増田 渉あて魯迅の手紙(1932.1.16付)

……『域外小説集』の発行は一九〇七年か八年で私と周作人が日本の東京に居たときです。そのとき支那では林琴南氏の古文訳の外国小説が流行で文章は成程うまいが誤訳が大変多いから私共はこの点について不満を感じ矯正したいと思つてやり出したのです。しかし、大失敗でありました。第一集(千冊印刷した)を売りだしたら半ヶ年たつて兎(に)角二十冊売れました。第二冊(集)を印刷するときには小さく(少なく)なつて五百冊しか印刷しなかつたが、これも遂に二十冊しかうれなかつた。それで、お仕舞、兎(に)角その年(一九〇七か八)から始まりその年に終つたので、薄ぺらい二冊だけです。その残本 殆んど全部である処の残本 は上海で書店と一所に焼失しました、だから、今にあるものも一珍本です、誰も珍らしくないけれども。内容を言へば、皆な短篇で米のアラン・ポー、露のガルシン、アンドレエフ、波蘭のシェンキヴィッチ(Henrik Sienkiewicz)、仏のモーパッサン、英のワイルド等の作品

で訳文は大変むづかしい。*13

魯迅の日本語の手紙だから、カッコを使って増田が小活字でことばを補っている。周兄弟が出版した翻訳書は、さっぱり売れなかったというこれまた有名な話だ。ここには、林訳小説について魯迅が不満を感じていた事実が明らかにされている。

1919年3月26日付のある「孔乙己」附記にも林紓に関係すると考えられる箇所がある。

この拙い小説は、昨年冬には書き上げていた。その時の考えは、社会のある生活を描いて読者に読んでもらいたいだけで、別に深い意味があつたわけでは決してない。しかし、活字に組んで発表しようという、ちょうどその時に 突然ある人が小説を用いて人身攻撃をさかに行つたのだ。たぶん著者は裏道に入り込み、読者の考えをことごとく彼と一緒に墮落させることになるのだろう。すなわち、小説は汚水をまき散らす道具であり、なかで侮辱しているは誰なのか、と考えさせるのだ。これは実に嘆かわしくかわいそうな事である。そこで私は、推測して読者の人格を損なわないように、とここに声明する。一九一九年三月廿六日記す。*14

3月26日という附記の日付を、林紓

「荊生」(『新申報』1919.2.17-18)および「妖夢」(『新申報』3.18-22。一説に3.19-23)の掲載日付と照らし合わせれば、確かにそうなのだ。「ある人」とは、林紘を指すであろう。林紘の小説を指して「人身攻撃」だと後の研究者がいうのは、この魯迅の記述をふまえている。

この附記を見れば、魯迅は、「孔乙己」が林紘流の小説だと勘ぐられないように予防線をはったとわかる。

古文を尊び白話を攻撃する人がいる。白話を主張する文学革命派に対して旧文人の抵抗がある。「現在の空気を吸いながら、陳腐な儒教、死にかけた言語を押しつけて現在を侮蔑している。これこそ「現在の屠殺者」である。「現在」を殺せば「将来」も殺すことになる」*15。

魯迅は、白話の側に立つ。ここでいう「現在の屠殺者」は、名指しこそされてはいないが林紘を指すと一般には考えられている。「(『新青年』では)その後、口語の試作が次第にふえ、一九一八年ころから全誌が口語化され、それに伴って外部からの攻撃が加わった。その筆頭格が林紘であり、ここも主として林紘を指すと思われる」*16と竹内好が説明しているとおりだ。

同じく、名前を伏せて林紘を批判するのが、唐俟名義で発表した「私たちは今どのように父親になるか[我們現在怎樣做父親?]」(『新青年』第6巻第6号1919.11.1)である。文中には「聖人之徒」と引用符を使ったことばが数回出てくる。これは、本稿で問題にしている林紘の

「引車売漿之徒」を魯迅が強く意識しているのはいうまでもない。

林紘の名前をだして揶揄している魯迅の文章もある。さきに全集の注で少し触れた「写真について[論照相之類]」(『語絲』第9期1925.1.2)だ。写真にまつわる迷信、二重写しでひとり二役の主従を演じる写真の流行だとか、梅蘭芳、トルストイほか外国の名士に悲哀と苦悩の表情を見ている。林紘に関する部分を紹介したい。

林琴南翁は、あれほど有名ではあるが、「知り合いになりたがる[識荊：李白の語]」のに熱心な人は天下にはそれほどいないらしく、私はかつて薬店の宣伝ビラで彼のお写真を見たことがあるけれども、しかしそれは彼のお妾さんにかわって丸薬がよく効いたことを手紙で感謝したもので、印刷されたのは、彼の文章だからというわけではなかった。「車を引いて豆乳をうる輩」の文字を用いて文章をつくる諸君についていうと、南亭亭長[李伯元]、我仏山人[吳趸人]はすでになく、省略する。

魯迅は、林紘には「お妾さん[如夫人]」がいると思っていた。事実かどうかはわからない。1869年、林紘は劉瓊姿と結婚し、1897年に夫人と死別している。翌年、楊郁を妻とした。7男を得、六十八歳で5女に恵まれているのは事実だ。

それにしても、魯迅によって描かれた

林紓の姿はみすばらしい。執筆したのが1924年11月11日であり、林紓の死去が同年10月5日だったから、なんらかの連想がわいたものだろう。林紓が以前に書いた「車を引いて豆乳をうる輩 [引車売漿者流]」を引用するほどだから魯迅の印象に強く残っていたとみえる。

発表順に、もうすこし魯迅の林紓に関する言及を紹介する*17。

1928年4月20日付「私の態度、度量と年齢 [我的態度気量と年紀]」は、青年から批判された魯迅からの反論である。魯迅は、批判する青年の文章をまず引用した。その中に「われわれは五四の時の林琴南氏を思い出さざるをえないのである！」*18と書かれている。魯迅が批判した老人林紓であった。保守派の代表者として文学革命陣の前に立ち上がった人物だ。だが、現在、青年から見れば、魯迅は、五四時期の林紓とかわらない位置にあり、林紓と同じことをやっている。そういう批判である。

魯迅は、それに対して以下のように述べる。

若者が老成するからには、老人は当然年をとる。林琴南氏のことを確かに思い出さなくてはならない。彼は後に本当に老いさらばえてしまい、白話に反対したが論戦はできなかったために、横合いからモデル小説を書いてひとりの武人に改革者を痛めつけさせた。すこし「綺麗」に言えば、「武器の文芸」に恍惚としたの

である。古いものと新しいものは、往々にしてまったく同じな点がある

たとえば、個人主義者と社会主義者は往々にして資産階級に反対するし、保守者と改革者は往々にして人生のための藝術を主張して暗黒について言うのをいやがり、ファシスト [棒喝主義者] と共産主義者は人道主義を嫌うなどだが、林琴南氏の事もまさにその証明なのである。だめな理由については、そのカギはまったく彼が早く生まれすぎて、その階級が「アウフヘーベン [奥服赫変]」されるのだから、早めに計画を変えろということを知らず、そのため結局のところ、はっきりとファシスト [Fascist] の本性をあらわしたということだ。しかし、私は、「じじい」がそうであっても、心配にはおよばないと考えている。どうせ若者よりも先に死ぬ。林琴南氏は、すでに死んでしまった。恐ろしいのは、将来の柱石になる若者が、彼 [林琴南] のようにでまかせにしゃべることなのだ。*19

林紓が発表した「モデル小説」というのは、前述した1919年2月の「荊生」、3月の「妖夢」を指しているのは明白だ。

魯迅に「ファシスト」と断定され批判された林紓は、もはや現代中国では生きてはいけぬ。なにしろ林紓は、こともあろうに「ファシスト」なのである。魯迅の林紓に対する見方は、1928年の時期

においてすでに極端な地点にまで到達しているといわなければならない。

その魯迅が1932年に書いた「罵倒と威嚇は戦闘では決してない[辱罵和恐嚇決不是戦闘]」*20のなかで、ある詩を評してつぎのようについて。「罵倒があり、威嚇があり、さらには軽はずみな攻撃があります。その実、まったく書く必要のないものです」(451頁)。自分が林紘を罵ったことは、魯迅には罵倒のうちに入らないということらしい。

1933年 8月10日付の旅隼名義「“ 中国文壇的悲観 ”」には、「私たちが考えてみるに、林琴南が文学革命を攻撃した小説は、まだそれほど昔でもないのに、現在ほどこへいってしまったのか」*21と書く。林紘を「ファシスト」と呼んだのに比較すれば、普通に冷静な発言に見えてしまう。

1935年 6月10日「“ 題未定 ” 草 (1-3)」では、「すでに名の聞こえた」スコット、ディケンズ、デフォー、スウィフト.....を紹介したのは、結局漢文しか知らなかった林紘であり、最大の「すでに名の聞こえた」シェイクスピアの脚本いくつかを紹介するのさえ、決して英語を専攻したわけではない田漢を待ったのである」*22という。林紘は早くからシェイクスピアの関連作品を翻訳しているが、魯迅はこれを無視した。

五四時期を境にして魯迅は林紘に対して厳しい評価を下していることがわかる。その流れの中に、山上正義あて「阿Q正伝」自注を置けば、魯迅の反林紘の姿勢が明らかである。

一方で、林紘が手紙を出した相手の蔡元培は、魯迅にとってはどういう人物だったのか。

魯迅と蔡元培

蔡元培は、1868年、浙江省紹興に生まれた。魯迅は、1881年に同じく紹興に生まれている。そのころ、蔡元培は私塾で勉強を続けていた。魯迅とは同郷人だ。その魯迅が、蔡元培の家柄を知らないはずがない。

1912年、南京臨時政府教育部が成立し、蔡元培が教育総長になる。魯迅の友人許寿裳が蔡元培に推薦してくれ、紹興にいた魯迅は、南京臨時政府教育部に就職した。

南京では、こういうことがあった。許寿裳が次のように書いている。

のちに蔡(元培)氏は命じられて北上し袁世凱を迎えに行った。次官(注：現在の副部長)の景耀月がやってきて(教育)部の仕事を代理することになった。この人物は手柄を立てたがっており、自分の勢力を拡大することを知るだけで、自分の縁故者を任用し、突然に会議を開いて雑誌を創刊するといいだした。魯迅は彼をそれほど相手にしてはいなかったし、彼の方はまったく人を知るところがなく、聞くところによると、こっそりと名簿を作って大總統府に送り任命してもらうよう希望したが、周樹人の名前は理由もなく削除され

た。幸いに蔡氏がもどってきて、すばやくこの事を取り消した。そうでなければ大笑いの種になるところだった。^{*23}

許寿裳の描く景耀月は悪人だ。ここで紹介されたのは、どのみち「そうでなければ大笑いの種になるところだった[否則開成大笑話了]」と書いているくらいだから軽い事柄なのだろう。それにしても、雑誌創刊だの、名簿に名前がないのだとわかったようなそうでないような、結局は不明瞭な内容である。だいいち、袁世凱を迎えに行くとはどういう意味か、説明がないからすでにここからわからない。細かいところは無視して、蔡元培の指導力が発揮され魯迅の首がつながった、とだけ受け取ればいい話かもしれない。ただ、魯迅が教育部の勤務に満足していた、という前提はあるにしてもだ。

高平叔『蔡元培年譜長編』上冊(北京・人民教育出版社1996.3. 407-425頁)から要約してその当時の事情を説明する。

南京臨時政府の教育部は、30人余にすぎなかった。複数の人は、蔡元培となんらかの関係がある。蔡と一緒に中国教育会、愛国学社、愛国女学で活動をしていた鍾觀光、蔣維喬、王小徐ら。ドイツと一緒に学んでいた俞大純、錢方度など。教育と文学に成績のある留日学生の許寿裳、魯迅など。あるいは、教育に情熱をもっている王雲五、謝冰などである。高平叔は、才能があれば用いるというのが蔡元培の態度であるという。人事に対す

る彼の態度は、北京大学校長に就任したときにも発揮されたであろう。

蔡元培一行が北上して袁世凱を迎えに出発したのは1912年2月18日だった。そもそも袁世凱をなぜ南京に呼ばなければならなかったのか。

清朝を崩壊させるには、袁世凱の力が必要だった。ゆえに、袁が清朝を倒すことができれば、孫文は譲位して袁を総統の唯一候補者として推薦することを声明する。これを提案したのが蔡元培だという。そのとおりに実行された。ただし、臨時政府は南京に置く、袁世凱は南京で任命を受ける、袁は法律を遵守する必要があることを条件とした。南京にこだわったのには理由がある。あくまでも革命政府の系統であることを示す必要があった。清朝が袁世凱に禅譲した印象を与えないためには、南京でなければならなかった。というわけで蔡元培一行が派遣されたのである。

2月19日、景耀月が南京にやってきて蔣維喬と教育部の終結工作について相談をする。これが、名簿問題にかかわる。孫文から袁世凱に交替するから、教育部の仕事、組織も整えなければならず、そのために人選をする必要があったということらしい(409頁)。

北京での蔡元培一行の任務は、結局のところ失敗した。3月21日、南京にもどっていた蔡元培は蔣維喬と教育部終結についての方法を相談している。翌22日、全員を集めて新しい臨時政府は北京で成立するだろう、南京の教育部はしばらく

解散となる旨を宣告した。そこである人選問題が出てくる。景耀月の考えでは、部員のなかの文学家、非教育家は除外したかった。しかし、蔡元培がそれに反対したということだ。

教育部が北京に移ることになりそれとともに魯迅も移動した。魯迅と蔡元培の交際の様子は、『魯迅日記』に記録がある。手紙を出した、もらった、会ったなどの簡単な記述だ。内容までは書いていないが、長い交流があったことがわかる。

簡単にいってしまえば、魯迅にとって蔡元培は同郷でもあり親しい人であった。しかし、福建の林紓個人とはまったく接点がない。魯迅は北京で林紓に会おうと思えば、その可能性は皆無ではなかっただろう。そうしなかっただけだ。魯迅は、林訳小説は読んだが、翻訳者である林紓とは知り合いでもない。

錢玄同と劉半農の「なれあいの手紙」によりムリヤリ旧文人の代表者にされた林紓ではあったが、「モデル小説」を発表してからは、誰の目にも保守派の指導者になってしまった。胡適は「なれあいの手紙」については反対した。偽名でそのような文章を書くのはまっとうな人がやることではないと考え、『新青年』の編集を自分ひとりでやるといった。すると魯迅は周作人と一緒になって、そうするなら投稿しないと胡適に刃向かったというのである。^{*24}

魯迅は、偽名論文で林紓を攻撃するのを当然だと考えていたことがわかる。そこまで林紓を嫌っていた。

その林紓が、魯迅にとっては親しい蔡元培にむかって「引車売漿者流」ということばを使った手紙を送った、あるいは公開した。

以上の人的関係を見ていけば、林紓書簡に対する魯迅の姿勢は最初から定まっていることが理解できる。

「引車売漿者流」についての魯迅理解と林紓の意図

私の疑問をくりかえす。魯迅の理解は、そのまま林紓の意図したことになるのか。

「引車売漿者流」については区別して考える必要がある。なにを区別するのだろうか。魯迅の受け止め方と林紓の意図である。丸山昇は、「少なくとも魯迅がそう受け取っていた」と注意深く説明していた。

しかし、多くは、魯迅の理解がすなわち林紓の考えだ、と認識している。混同している、あるいは短絡していると私はいう。また、丸山も結局のところ両者を同一視したのである。

魯迅は、「引車売漿者流」について、蔡元培の父親を指すと理解した。それは、山上正義あての手紙に魯迅自身が書いているから間違いはない。魯迅は、そのように把握した。それは、いい。私がいいのは、林紓自身の考えはどうだったのか。魯迅がいうように「引車売漿者流」と書いて蔡元培の父親を指す、と林紓は最初から意図していたのか。それは事実か、ということだ。

魯迅は「蔡元培氏ノ父ヲ指ス」と説明

した。丸山昇は、その箇所鋭く反応している。蔡元培の父がまさか「引車売漿」ではあるまいと考えて調べた。その結果、「父親は錢莊(昔の金融機関)の「經理」(支配人)であることを明らかにした。さすがだと私は思う。事実をゆるがせにしていない。だが、「一族がほとんど商業に従事している」ことをもって「引車売漿者流」だと考えた。

私はここを見て、丸山は、従来から存在する林紓批判に引きずられたと判断する。ことばをかえれば、魯迅を中心に林紓を見ている。

悪名高い林紓のことだ、蔡元培の家柄までも引き合いに出して攻撃するくらいのは平気でやるし当たり前だろう。こう考えたとしても不思議ではない。

丸山は、魯迅が書いたことを基礎にして、まわりの現象を解釈している。せめて、評価の基準を魯迅から離し、林紓との中間にでも移動すれば、見え方も違ったものになったのではないか。私は、批判をしているのではない。日本の研究者にまで林紓批判は浸透している証拠だと思うだけだ。

蔡元培の父宝煜は、丸山が調べたように錢莊の支配人であった。1877年に逝去し、その時わずかに四十歳という。錢莊の支配人のどこが「車を引いて豆乳を売るやから[引車売漿者流]」だというのだろうか。あとで示すが林紓は、別のことばで「小商人[稗販]」といっている。だが、錢莊の支配人は、てんびん棒で物を売り歩く小商人とは根本的に違う。

錢莊の支配人と車を引いて豆乳を売る小商人は、読み書きを基準にすれば、まったく異なる。その異なるものを矛盾なく、魯迅が自注で示したように理解するためには、「商業」ということばで括る以外には方法がない。そうしなければ魯迅の注釈は了解できないと丸山は考えたのだろう。

これがのちに「学者としては「家柄」がよくない」とことばを補足した理由である。「商業」に対比させるためには「学者」が必要だったとわかる。その意味では用意周到に考えている。

だが、読み書き、それも古文ができるかできないか、これが分かれ目だ。両者は、厳然と区別してある。林紓にとっては、説明する必要もない事柄だ。当時の中国人も皆そうだと理解していたのではないか。錢莊の支配人と小商人を同一視する人はいない。それをいくら魯迅が書いているからといって蔡元培の父親を「車を引いて豆乳を売る輩」、小商人と同じだと考えるのは間違っている。

蔡元培にあてた林紓の手紙から該当部分を引用する。

若尽廢古書，行用土語為文字，則都下引車売漿之徒，所操之語，按之皆有文法，不類閩廣人為無文法之啾啾，拋此則凡京津之稗販，均可用為教授矣。

もしすべての古書を廃し、卑俗なことばを用いて文章を作るならば、北京の車を引いて豆乳を売る輩が操っ

ていることばはいずれも文法がありますから、福建広州人の文法もない鳥の鳴き声とは違い、そうであれば、北京天津の小商人はだれでも教授に採用できることになります。^{*25}

すこし結論めいたことを書いておこう。手紙の題名は「答大学堂校長蔡鶴卿太史書」という。手紙だから題名などあるはずがない。それがなぜあるかといえ、林紓が自分の著書に収録したときそう命名したからだ。その題名に注目する必要がある。「太史」という官名を使っているところだ。蔡元培が清朝の進士であり、翰林院編修であったからにほかならない。年齢からいえば林紓の方がはるかに年上だが、彼は挙人にすぎなかった。だから、太史を使用して敬意を表したというわけ。その手紙に蔡元培を罵る語句があると考えるほうが、基本的におかしい。

林紓が問題にしているのは、一般論として口語で文章を作ることができるか、ということだ。しゃべりことばであることが重要である。しかも、同じ口語でも福建広州は(文法がない、というのは行き過ぎだが)不可なのだ。ということで、北京天津に限られる。北京人天津人であれば、すべて教授になることができる。

林紓が福建の人間であることを思いだしてほしい。林紓の文章では、福建人と広州人は、対象外になっている。しかし、福建人である林紓が、なぜ京師大学堂(後の北京大学)の教員になることができたか^{*26}。いうまでもなく古文を使用する

能力をそなえているからである。林紓が説明しているのは、こうだ。

口語を前面にだして強く主張すると、文字を知らない小商人でも北京天津人であれば、教授になる可能性ができてきますよ、と少し皮肉をまじえて指摘しただけだ。林紓はそのように白話をとらえていた。だから、当時提唱されていた白話使用を安易な考え方だと判断し、それに対して疑問を提出したにすぎない。ここには、蔡元培の家柄に対するあてこすりなど存在する余地はない。林紓は、もともと蔡元培の家柄、あるいは彼の父親のことなどは考えていないのである。

そもそも、林紓の家は貧しく、彼の父親も商売をしていた「家柄」だ。その林紓が、仮に商売をしていた蔡元培の父親を引き合いにだして「蔡元培が学者としては「家柄」がよくないことをあてこすっていた」というのは、矛盾する。蔡元培の「家柄」が悪いというのであれば、林紓自身も同様に「家柄」は悪い。他人を批判して自らも傷つくことを書くだらうか。奇妙なことだといわざるをえない。

どうやら、丸山は、林紓よりも魯迅の理解の方を重視した。「少なくとも魯迅がそう受け取っていた」と厳密に考えていたようだが、林紓については追求していない。結局のところ、魯迅の理解は、すなわちそのまま林紓が考えていたことになり、これが普及してしまった。

だが、魯迅は魯迅だし、林紓は林紓なのだ。ふたりは別人である。

魯迅が林紓の文章から読みとったこと

は、林紓とは直接の関係がない。林紓の意図とは別に魯迅が勝手に解釈したことをいっている。

問題は、魯迅の方に存在すると考えるしかないだろう。

魯迅と蔡元培は、同郷である。魯迅は蔡元培の父親が錢莊の支配人であったことを知らないはずがない*27。知っていてわざと「蔡元培氏ノ父ヲ指ス」と書いた。「引車売漿者流」と蔡元培の父親を結びつけることによって、魯迅は林紓に濡れ衣を着せたのである。林紓は、魯迅によれば「ファシスト」である。「ファシスト」に対しては何をしても、なにをいってもいい。遠慮することはない。濡れ衣を着せたという意識は、魯迅にはなかったであろう。

2005年版『魯迅全集』の注

1982年版『魯迅全集』の注は上に紹介した。念のため2005年版『魯迅全集』の注を見てすこし驚いた。「引車売漿者流」について説明が加筆されているからだ。

山上正義あて魯迅の手紙が引用されている部分までは同文である。以下が新しい。

考えるに蔡元培の父親はかつて錢莊の支配人をしたことがあったが、「豆乳売りを生業にしていた〔以売漿為業〕」のでは決して、ない。このデマは思孟の「息邪」(一名「北京大学鑄鼎録」)のなかの「蔡元培伝」(1919年8月7日、8日の『公言報』に掲載)か

ら出ている。文中で、蔡元培の「父某は、豆乳売りを生業にしていた。しばしば侮られ、その子につきのように言った。「わしは賤業によって軽んじられたが、おまえは学問に励んで恥をそそがなければ、わしの子ではないぞ」と」。魯迅は当時書いた「寸鉄」(『集外集拾遺補編』)のなかで攻撃をくわえ、それが「陰でこそそとした事をちょっと行なった」だけの「小さな邪悪」にすぎず、「デマをとばし罪に落とし中傷するのは中国の主要な国粋でもある」と言った。^{*28}

この注釈は、『公言報』に掲載された思孟「蔡元培伝」を紹介した箇所が以前のものとは異なる。しかも、思孟の文章を魯迅が読んでいたことも指摘している。重要である*29。

思孟の文章は、文学革命陣営に属する人々を批判するものであった。『公言報』に連載されたのは、1919年8月6日から13日まで。内容は、序言、蔡元培伝、沈尹黙伝、陳独秀伝、胡適伝、錢玄同伝、徐宝璜劉復合伝だという。

当時、それを読んだ胡適は、『每週評論』第33期(1919.8.3)*30に筆名天風で「關謬与息邪」を発表した。蔡元培に関係するので紹介する。

北京大学を退職した教員で宜興の徐某は、数ヵ月前「關謬」を書いて蔡子民(元培)を痛罵した。近頃また

「息邪」を書いて蔡子民、陳独秀、胡適之、沈尹黙らを悪罵した。ここでは蔡氏について「ドイツに5年居住しながら百余の言葉しか知らず、フランスに3年逃亡しながら10余の言葉しか知らない」と書く。さらに陳沈諸君が外国語に通じていないと嘲笑し、胡適が「英語は精通しているに近いが、知っている言葉は多くはない」という。私たちははじめ見たとき、この徐氏は外国語に精通しているはずだと考えた。ところが第1頁を開いてみると、Marx を Marks と綴っている。この「誤り[謬]」も「うち消[關]」さなければならぬ。

思孟は、北京大学の、といってもすでに退職しているらしいが、徐某だという。徐某については詳細がわからない。北京大学内に複雑な対立があったことを推測させる。蔡元培が北京大学校長になったとき新進の教授を多く招聘した。ということはクビになった教授もいることを意味する。ならば、蔡校長に恨みを抱いていたとしても不思議ではない。8月といえばあの五四事件の直後だから混乱状況が続いていたということだろうか。

重要なのは、魯迅が思孟「蔡元培伝」を読んでいることだ。蔡元培の父が豆乳売りをしていたと思孟が書いている。しかし、いまさらくり返すまでもなく、蔡元培と同郷の魯迅にとって、それが中傷であることは瞬時に見抜いていただろう。

では、その中傷と林紓はどう関係して

いるのか。ここでは、時間順に発表された文章を並べるとわかりやすい。(私が見て重要文献に をつける)

1919

- 2.17-18 林紓「荊生」『新申報』
- 3.18 林紓「林琴南致蔡鶴卿書」『公言報』 引車売漿之徒
- 3.18-22 林紓「妖夢」『新申報』(一説に3.19-23 『林紓研究資料』544頁)
- 3.21 蔡元培「答林君琴南函」(3.18付) 『北京大学日刊』 林紓書簡を収録 / 引車売漿之徒
- 3.24 林紓「林琴南再答蔡子民書」『公言報』
- 3.26 林紓「林琴南再答蔡子民書」『新申報』『時報』
- 3.26 魯迅「孔乙己」附記 『新青年』第6巻第4号1919.4.15
- 4月 林紓「論古文白話之相消長」『文藝叢報』第1期
- 5.4 北京学生之示威運動
- 8.7-8 思孟「蔡元培伝」「息邪」欄『公言報』 父某、以売漿為業。
- 8.12 魯迅(黄棘)「寸鉄」『国民公報』(原無標題) 思孟批判
- 8.12? 胡適(天風)「關謬与息邪」『每週評論』第33期(表示は8.3) 思孟批判

2月から3月にかけては、林紓の公表した小説、および蔡元培あての手紙をめぐって応酬があった。これに呼応するように北京大学へ思想弾圧が加えられているという風説風聞流言飛語が報道されている。風説風聞流言飛語だから事実

とはかぎらない。文学革命派が大いに騒いでいるちょうどその時だった。5月4日、北京において学生デモが実行され傷害事件が起こった。話題はそちらに移動したのだ。

蔡元培がふたたび話題にされるのは、それから約3ヵ月後のことになる。

問題を解決する鍵は、8月に発表された思孟「蔡元培伝」という中傷文章だ。思孟は、該文において蔡元培の父親が豆乳売りだ〔父某、以売漿為業〕とウソを書いた。林紓の蔡元培あて手紙よりも遅れて約4ヵ月半後のことである。逆にいえば、林紓の蔡元培あて手紙は、中傷とは関係なくそれよりもずっと前に書かれている。

これは、なにを意味するか。簡単なことだ。林紓が手紙に書いた「引車売漿之徒」というのは、蔡元培の父親とは無関係であることを示している。

蔡元培の父親が「車を引いて豆乳を売る輩」は、もともと中傷であった。しかも、その中傷を流したのは林紓ではなく北京大学元教授徐某(筆名思孟)のしわざである。林紓とは、関係がないことを重ねていっておく。

蔡元培に招かれて北京大学の教授に就任(のち北京大学校長)した蔣夢麟は、蔡を追悼してつぎのように書いている。「氏は、日頃性情はおだやか、まるで冬のように敬愛すべきで、ことば厳しく顔をしかめるといことはなかった。事を処理し人と交際するのは、恬淡としてゆったりとしていた。高官高位の人である

うと、車を引いて豆乳を売る輩〔引車売漿之流〕であろうと、会えば態度は変わらない。しかし、ひとたび大事にあえば、激しい気性がたちまちあらわれ、発言し文章を作り、いいかげんに同調するということはなかった」*31

蔣夢麟は蔡元培を顕彰するために文章を書いている。「引車売漿之流」が蔡元培の父親を中傷する文句であれば、蔣がその文章の中で使用するわけがない。当時、それが普通にみられる受け取り方だとわかる。

魯迅は、その事情を明らかに理解していた。林紓とは無関係であることもだ。にもかかわらず、魯迅は、なにも知らない日本人の山上正義に、あたかも林紓が行なったかのようにその中傷を吹き込んだのである。中傷を伝えてしまったのは魯迅の勘違いで不注意だった、と擁護する人がたとえいたとしても、手紙に書いた事実は否定することができない。

これは、魯迅によって引き起こされた林紓冤罪事件にほかならない。 □

【注】

- 1) 魯迅著、丸山昇解説「『阿Q正伝』日本語訳について」『海』1975年9月号1975.9.1。249頁
- 2) 1982年版『魯迅全集』第1巻(北京・人民文学出版社1981/1982。1981年初版だが、手元のもののが82年重版だから1982年版という)の注は「陳大澄等訳」と誤り、また、林紓訳ではないことを指摘していない。528頁。2005年版『魯迅全集』も同様。
- 3) 魯迅著、林守仁訳『支那小説集阿Q正

- 伝』四六書院1931.10.5 国際プロレタリア文学選集。12頁
- 4) 魯迅著、林守仁訳『支那小説集阿Q正伝』17頁
- 5) 佐藤春夫、増田渉訳『魯迅選集』岩波文庫。1935.6.15 / 1937.6.10五刷。47頁。次も同文。増田訳『魯迅作品集1 阿Q正伝』東西出版社1946.10.30。15頁。
- 6) 魯迅著、増田渉訳『阿Q正伝』角川文庫1961.4.5 / 1971.1.30二十八版。49頁
- 7) 井上紅梅、松枝茂夫、山上正義、増田渉、佐藤春夫訳『大魯迅全集』第1巻 改造社1937.2.14。130、135頁
- 8) 房向東「“ 国粹 ”: “ 額上腫出一顆瘡 ” 魯迅与林琴南」『魯迅与他 “ 罵 ” 過的人』上海書店出版社1996.12。295頁。「人身攻撃」ということばは、姜徳明「魯迅と銭玄同」(『書葉集』広州・花城出版社1981.5。145頁)においても、林紓の「モデル小説」を評して使われている。
- 9) 魯迅著、丸山昇訳『阿Q正伝』新日本出版社1975.11.20。169頁
- 10) 竹内好訳『魯迅文集』第1巻 筑摩書房1976.10.8。414頁
- 11) 『魯迅全集』第1巻528頁
- 12) 『魯迅全集』第1巻190頁
- 13) 増田渉『魯迅の印象』角川書店1970.12.20。147-148頁
- 14) この附記はのちに魯迅によって削除された。『新青年』第6巻第4号1919.4.15。扉にそう表示される。影印本の奥付は1919.9.1になっている。
- 15) 「随感録(57) 現在的屠殺者」『新青年』第6巻第5号1919.5
- 16) 竹内『魯迅文集』第3巻 筑摩書房1977.3.15。370頁
- 17) 姜徳明「魯迅与林琴南」(『活的魯迅』上海文藝出版社1986.8)がある。
- 18) 『語絲』第4巻第19期1928.5.7。1982年版『魯迅全集』第4巻。108-109頁
- 19) 『語絲』第4巻第19期1928.5.7。31頁。初出では、^{ママ}捧喝主義者、^{ママ}Facistist と誤植している。両者ともファシストの意味。1982年版『魯迅全集』第4巻。111-112頁
- 20) 1982年版『魯迅全集』第4巻所収
- 21) 1982年版『魯迅全集』第5巻。248頁
- 22) 1982年版『魯迅全集』第6巻。357頁
- 23) 許寿裳「10入京和北上」『亡友魯迅印象記』北京・人民文学出版社1953.6 / 1955.9北京第三次印刷。影印本。35頁
- 24) 沈尹黙「我和北大」陳平原、夏曉虹編『北大旧事』北京・生活・読書・新知三聯書店1998.1 / 2003.8北京第2次印刷。173頁
- 25) 林紓「答大学堂校長蔡鶴卿太史書」林薇選注『林紓選集』文詩詞卷 成都・四川人民出版社。166頁。林紓『畏廬三集』上海・商務印書館1924.7。26才-28ウ。林紓は、自分の著書に収録して「答大学堂校長蔡鶴卿太史書」と名付けている。『公言報』(初出未見)には「林琴南致蔡鶴卿書」と題されており、のちに収録した『新潮』もそうになっている。もともと手紙だから、こちらはいずれも便宜的に表題をつけただけ。
- 26) 1903年、京師大学堂訳書局に勤務しはじめる。1906年、同校予科および師範館の経学教員、1910年、大学経文科を教える。1913年に辞職した。
- 27) 本稿を書いてから同じ表現をしている日本の論文があることを知った。「実際には蔡元培の父親は両替商の支配人であり、豆乳売りだったというのは事実ではない。このことは蔡元培と親しかった同郷の魯迅が知らぬはずはなく、「車を引いて豆乳を売る商人」と書いて蔡元培の父を貶めている林紓の意図を暴露しているのであろう。吉川榮一「林紓と「文学革命」」熊本大学文学会『文学部論叢』第67号2000.3.20。85頁。注釈番号は省略した。「魯迅が知らぬはずはなく」という表現が似ているだけで、本稿における私の考えは、いうまでもなく該文とは異なっている。

- 28) 『魯迅全集』第1巻北京・人民文学出版社
2005.11. 554頁
- 29) 思孟の文章を紹介する文章がある。王永昌「“引車売漿者流” 指的是誰?」『魯迅研究百題』長沙・湖南人民出版社1981.11. 117-120頁。これによると、『公言報』の文章を発見したのは孫玉石らという。119頁
- 30) 『每週評論』第33期の発行は、日付よりも

遅れていたとわかる。「蔡元培伝」(掲載はたぶん8月11日)について書いているので、『每週評論』第33期の発行日は、8月12日以後のことになる。

- 31) 蔣夢麟「試為蔡先生写一筆簡照」蔡建國編『蔡元培先生紀念集』北京・中華書局1984.7. 76頁。初出は重慶『中央日報』1940.3.24だという。

【清末小説研究会の本 出版予告】

樽本照雄著

林紓冤罪事件簿

A5判 上製 箱入り 418頁 限定150部 定価：8,400円

林紓(りんじょ)は、清朝末期から中華民国初期において外国文学翻訳家として有名です。翻訳作品数は200点をうわまわり、「林訳小説」とよばれて当時の読者から大歓迎されました。しかし、彼は、外国語ができなかった。「外国語を理解しない翻訳者」といわれることにもなったのです。

林訳小説の欠陥のひとつは、シェイクスピア、イブセンの戯曲を小説化して翻訳した、と嘲笑され批判されて現在に至っています。そればかりか、文学革命が唱えられていた五四事件の直前に、林紓は武力による北京大学抑圧をたくらんでいた、と非難されてもいるのです。

ところが、批判の根拠である戯曲の小説化という事実は、ありませんでした。しかも、武力を背景にして文学革命派を攻撃する旧派の代表者林紓はどこにも存在していないのです。事実無根ですから林紓冤罪事件といえます。林紓の方から文学革命派を見ればどうなるか。その試みです。

【内容目次】

林紓を罵る快樂

- 1 林紓の翻訳 / 2 『青年雑誌』から『新青年』へ / 3 林紓が奇妙な登場のしかたをする / 4 林紓批判のはじまり / 5 林紓評価をめぐる新しい展開 / 6 林蔡問題 / 7 陳独秀問題 / 8 林紓書簡 / 9 北京大学をめぐる風説風聞 / 10 林紓が書いた短編小説 / 11 張厚載の退学処分 / 12 結論

林訳シェイクスピア冤罪事件

- 1 林訳小説の欠陥 / 2 定説がくり返される / 3 林訳シェイクスピア歴史劇の底本

/ 4 結論

林訳イブセン冤罪事件

林訳スペンサー冤罪事件

林訳セルバンテス冤罪事件

林訳小説冤罪事件の原点 鄭振鐸「林琴南先生」について

魯迅による林紓冤罪事件 「引車売漿者流」をめぐって

魯迅「出乎意表之外」の意表外

林訳小説評価の最近

《亞森羅蘋之勁敵》と《竊鑰案》の原作
1910年代ルパン・パスティッシュ

渡 辺 浩 司

1. 《竊鑰案》

《竊鑰案》(競夫)なる短篇小説が《清末民初小説書系・偵探巻》(于潤琦主編, 中国文聯出版公司1997.7.20)に収録されている。作者(或は訳者)の「競夫」については未詳。内容は、阿森魯賓(アルセーヌ・ルパン)が盗んだラジウムをフランスの女探偵の戈頓が取り戻し、また奪い返され、また取り戻すという話である。

ルパンがラジウムを盗む? フランスの女探偵と対決? こんな話がルパンものにあつたかなと思つた。邦訳には見えないので、雑誌にのみ掲載され短篇集には採録されていないのか、或は競夫の創作かとも考えた。

しかし、物語はルパンが主人公ではなく、女探偵「戈頓」がヒロインなのである。

「戈頓」の中国語音をカタカナで示すと「ゴォドン」となる。フランスの女探偵「ゴォドン」……どこかで見たことがある。

2. 『扉^{ドア}を叩く音』

日本の博文館が大正九(1920)年に創刊した雑誌『新青年』で似た名前を見たことがあるのを思い出した。同誌第三巻第五号(1922.4.1)に掲載された『扉^{ドア}を叩く音』(エヂス・マクベイン, 西田政治訳)で見たのであつた。冒頭を示す。

「美貌と敏腕とで巴里で知られた若い女探偵のファン・ゴルドン嬢の所へ……」(201頁)

残念ながら、物語は《竊鑰案》と違つていたが、「戈頓(ゴォドン)」と「ゴルドン」、そしてフランス(パリ)の女探偵、この一致は何かあると考えたので、作者のエヂス・マクベインについて調べてみた。しかし、この時は「エヂス・マクベイン」の正確な綴りすらわからなかつた。

3. 『THE RADIUM ROBBERS』

その後、『清末小説から』第64号(清末小説研究会2002.1.1)に、大塚秀高「清末民初探偵小説管窺」が掲載された。その最後に《竊鑰案》への言及がある。以下に示す。

「「窃鑰(ラジウム)案」につき、一言しておきたい。……内容は、『礼拝六』第27-28期に掲載された上記の「亜森羅蘋之勁敵」と同じものであつて、後には『亜森羅苹全集』……に収録されており……ルプランの作品に間違いのないようだが、ルプランにそうした作品はな

く、劉樹森が「清末民初中訳外国文学研究報告(私家版)」で(美)“ The Radium Robbers ” とするのが正しく、ルパンのパスティッシュものとみるべきであろう(劉樹森は「亜森羅蘋之勁敵」の訳者周瘦鵬の以下に附記する序文によったとおぼしい。)。(21頁)

そして、「附記」に《亜森羅蘋之勁敵》の序文が翻刻されている。関係部分を示す。

「此篇原名「雷碇之劫賊」THE RADIUM ROBBERS見於美国某雜誌上，述一女偵探家萼奈高頓敗亜森羅蘋事。」(22頁)

これは大きな手がかりで、それどころか答を出されたようなものであった。あとはアメリカの某雑誌を見つければいだけである。

それ以降、この件については忘却していた。最近、思い出し、まだ結論も出ていないようなので*1、また調べる気になった。

4 . EDITH MACVANE、“ Fanny Gordon ”

『THE RADIUM ROBBERS』をインターネットで検索してみると、William G. Contento 管理ホームページ「The FictionMags Index」に出ており、著者はEDITH MACVANE、掲載誌は『McClure's』1914年7月、だとわかった。更に『McClure's』について検索してみると、該当号が国会図書館関西館にあることが判明した。そこで、同じく同館に所蔵される《禮拜六》第27(中華

圖書館1914.12.5) , 28(1914.12.12)期掲載《偵探小説 亞森羅蘋之勁敵》(瘦鵬譯)と《小説月報》第8巻第3号(商務印書館1917.3.25)掲載《竊鑄案》と併せて読んでみた*2。

間違いなく、《偵探小説 亞森羅蘋之勁敵》及び《竊鑄案》の原作は、EDITH MACVANE著『THE RADIUM ROBBERS』, 『McCLURE'S MAGAZINE』 volumeXL no.3(43-3, McClure Publications, Incorporated, 1914年7月)掲載であった*3。

「戈頓」そして「エヂス・マクベイン」とアメリカの某雑誌の正体が明らかになったのである。

あらすじを述べる。

() *4

Fanny Gordonはパリの劇場にやって来て、一か月前Arsène Lupinにより研究所から盗まれた6グラムのラジウムを取り返し、ある都市の金庫室に預けておいたことをd'Uzbac公爵夫人とChatellerault子爵に報告する。そこへチーフからの使者が現れ、彼女を車に乗せる。実はその使者は偽者で、彼女は銃を向けられたまま、遠くへと連れて行かれた。

彼女は「ピエール精神病院」と看板が掲げられている、高い壁に囲まれた古いシャトーに監禁された。10日目にシャトー内に飛行機が不時着する。パイロットはスミレのひげそり石鹸の香りを伴った男で、パリのthe Aéro Club

のPaul de Czernyと名乗り、ウィーン - パリ間のレース中で気象の悪化で着陸したと言う。彼女は事情を話し、一緒に連れて行くよう頼むが、一人乗りだと断られ、その代わりパイロットに勧められて、手紙を託すことにする。子爵に宛てて、彼女の下宿に行きToulouseのLyonnais銀行の貸金庫の利用証と鍵を受け取ることとそこに預けてあるスーツケースにお宝が入っていることを知らせ、Walden夫人(下宿の世話人)、銀行の担当者に宛ててもその旨を書き知らせる。彼女は手紙とティー・ローズをパイロットに渡し、飛び立つのを見送った。

2日後、彼女は脱出に成功し、駅にたどり着く。そこで、パリから汽車で1時間の所にいたことを知り、パリの自宅に戻る。Walden夫人に、子爵が2日前に鍵などを受け取りに来たことを聞き、彼女は一安心する。だが、警察本部に電話すると、子爵からは何の連絡も無いと言われ、子爵宅に連絡すると、この3日は病気で外出していないと言われる。彼女は慌てて旅支度をし、汽車でToulouseへ向かう。翌朝、Lyonnais銀行を訪ねると、子爵が昨日彼女の手紙と鍵を持ってやって来て金庫からスーツケースを持ち去ったと言われる。後には、Arsène Lupinの署名入の手紙(the Aéro Clubの紋章入の便箋)とティー・ローズが残されていた。彼女はパリに戻る。

彼女は子爵と一緒にthe Aéro Clubを訪れる。Paul de Czernyというメンバーはいなかったが、便箋は偽物で、彫版工が1週間前にHotel AthèneのErnest Distramに渡したものと判明する。子爵は彼女から捜査を引き継ぎ、彼女をタクシーに乗せ、自宅まで送らせる。しかし、子爵と分かれた彼女は、再びやる気を出し、Hotel Athèneへと向かう。Distramはホテルを離れており、ウィーンに向かうとのことであった。彼女は銀行で五千フランを引き出し、ウィーン行急行に乗る。オーストリアにはピッチブレンドの鉱山があり、ラジウムの供給源の中心なので、ウィーンならば簡単に売買できるのである。汽車は出発する。

コンパートメントの同乗者は、伯爵夫人、ドイツ人教授、フランス人司祭であった。彼女が食堂車へ行くと、伯爵夫人も向かいに座った。夫人が彼女のワインに何か入れたのを見逃さず、彼女は事無きを得る、そして床に落ちていた夫人のハンカチを拾い、香辛料を包んで自分のバッグにしまう。コンパートメントに戻り、めまいを感じた彼女はドイツ人教授に窓を開けるよう頼む。窓を開けると、スミレのひげそり石鹸の香りが漂ってきた。彼女は、この男が以前のパイロットであることに気づき、バッグからティー・ローズを取り出し、「あなたのものでしょ

う！」と言って男に渡す。すると、男は列車の非常用ハンドルを引き、列車を停める。乗務員がやって来ると、男は、アラームを鳴らしたのは彼女だと言い、他の二人も彼女がやったと証言する。またもLupinにしてやられた彼女は、次の駅で逮捕・連行されることになり、列車は動き出す。トンネルに入り、暗闇の中で彼女の目に何かが入ってきた。

彼女はバッグから取り出したゴーグルをはめ、窓を見て「飛行機レース！」と叫んだ。それにつられて、三人が窓の方に向いた時、彼女はハンカチに包んだ香辛料を彼らに向かってばらまいた。三人が苦しむ間に、彼女はドイツ人教授の頭上のラックから箱の中のカメラを掠め取り、窓の外に池へ投下し、付近の電柱の番号を覚え込んだ。乗務員が現れたので、彼女はハンカチのイニシャルを示し、伯爵夫人がやったと申し立てた。乗務員が警告を与え、去った後、彼女は目立つように自分のマフの裏地を破り、化粧道具入れを中に押し込んだ。また、暖房用のスチームパイプに自分の手首を当てて、火傷させ、そのマフで覆った。汽車はStrassburgに停まり、警官たちがコンパートメントに入ってきた。彼女は、火傷したので手錠をしないよう頼み、連行されようとした。その時、男が、彼女のマフは伯爵夫人のものだと訴え出、夫人もそれに合わせたので、彼女は夫人にマ

フを渡した。列車は出発した。彼女は二千フランを払い釈放された。

2時間後、ウィーン発パリ行の急行が到着し、F.G.のイニシャル入りバッグを持った若い女性が乗り込んだ。その30分後、ローカル列車が到着し、別の山歩きの服装の若い女性が乗り込み、小さな山の駅で下り、馬と馬車を買ひ、それに乗って丘を越えていった。

ラジウム盗難についての失意の報告を書いていた子爵の書斎に、山歩きの服装の女性 = Fanny Gordonが訪れる。彼女はカメラを取り出し子爵に渡し、彼は中にラジウムがあるのを見て、すぐに警察本部に電話し、チーフと化学者らと呼ぶ。化学者によって確認された後、彼女はどのように取り戻したのかの説明を始める；トンネルの中で彼女が見たのは、宙を舞う光る蛾だった、しかし手を伸ばしても何も無いし、トンネルから出て何も無かった。ラジウムの隠し場所を考えると、その光線源からラックに何気なく置かれている箱の中のカメラだとわかった。香辛料で目潰ししている間に、カメラを外に投げ出した、次にLupinらを騙すために、破った自分のマフにラジウムの箱と同じ大きさの化粧道具入れを押し込み、放射線で火傷したふりをした。更にLupinらの追跡をまくために、下車後、自分と似た外見で、パリに行く若い女性を見つけ、服を取替え、切符と千フランを渡した、一方、彼女自身は山を

越えていきラジウムを釣り上げたのである。

チーフは、最後に、パリ市民すべてが史上初めてArsène Lupinが負かされたことを知るだろうと言う。

フランス(ヨーロッパ)という舞台、会話の端々に見られるフランス語、そして女性探偵の奇抜でありながら優雅さを感じさせる活躍が楽しめる作品である。

冒頭部分についてであるが、主人公Fanny Gordonはアメリカ人で、フランスのthe Secret Serviceで働くChatellerault子爵を助けて事件を解決する設定になっている*5。Arsène Lupinがどのように盗んだのかやFanny Gordonがどのように事件に関わるようになったのかの説明は無い。キュリー夫妻によりウラン鉱石からラジウムが発見されたのが1898年、そしてマリー・キュリーによりラジウムが単離されたのが1910年であるから、作品の発表当時もラジウムが貴重だったのであろう、作中では“1グラム=10万ドル”になっている。

著者のEDITH MACVANEについてはアメリカの作家、1880年ボストン生まれ、卒年未詳で、1906年から1912年の間に6冊の小説を出版したという以外、ほとんど知るところが無い*6。

《亞森羅蘋之勁敵》の訳者「瘦鵑」は周瘦鵑で、1895年生まれ、1968年没、作家・翻訳家・雑誌編集者として活躍した。

5. まとめ

最後に、翻訳の出来について見ておく。両者とも省略はあるものの(《亞森羅蘋之勁敵》には一部加筆も見られる)、物語の流れには忠実なので、良訳だと思われる。そして《亞森羅蘋之勁敵》が白話訳で、《竊鏹案》が文言訳であるのが大きな違いである。以下に冒頭の英語原文と両方の中国語訳文を示す(原文と比較しやすいように、中国語には標点符号を加えた)。

THE curtains parted, and Fanny Gordon, in trailing chiffon, slipped into the box. In spite of Tannhäuser's solo, rising from the great stage beneath, the Duchesse d'Uzac and her brother sprang to their feet to greet the newcomer.

“Mademoiselle, what news?”

Fanny, seating herself, waved her fan slowly as she smiled at her friends and surveyed the house. Then, in an almost imperceptible whisper, she said:

“First, look away from me look down there at the stage. That is right. We must not appear to be talking secrets.”

And, still more softly, she breathed:

“I have found the six grams!” (64頁, 改行は原文のまま)

(カーテンが少し開き、Fanny Gordonがドレスを引きずって、ボックス席にすっと入ってきた。下の大きな舞台からタンホイザーのソロが聞こえてきたが、d'Uzac公爵夫人と彼女の兄(或いは弟)は立ち上がって、そのお客を迎えた。「マドモアゼル、何かニュースです

か？」

友人たちに微笑み、劇場内を見渡しながら、Fanny Gordonは席につき、扇子をゆったりと動かした。それからほとんど気づかれないくらいの小声で、
「まず、私を見ないで下さい 舞台の方を見て下さい。そうです。密談していると思われてはいけません。」

そして更に声を落として、ささやくように言った、「6グラムを見つけましたよ！」)

《亞森羅蘋之勁敵》

華燈已上了，庇霞娜已叮叮噹噹的響了，舞臺上繡幕已慢慢兒的開了。蕩奈高頓掠燕也似的閃入包廂裏頭，亭亭而立。公爵夫人特勃石克和他的阿兄却德勞爾子爵即忙起身相迎，同聲問道：“姑娘，可有甚麼消息帶來麼？”

蕩奈盈盈的坐了下來，玉手中執着一把小扇，兀是搖着，一壁頰暈雙渦，嫣然微笑，抬着那一雙翦水明眸，向四下裏一溜，悄然說道：“請你們倆把眼兒注在臺上，別睜睜的只是望着吾。教人家見了，疑吾們在這裏談甚麼秘密事呢。”

接着更加放低了聲音說道：“吾已尋到了那六格萊姆的雷錠 價值六十萬元 咧！” (1-2頁)

《竊鏽案》

法國女偵探戈頓者，一夕赴某劇園，乘舞台開幕之際，翩然入某廂中。廂中觀劇者為公爵夫人玉布克及其弟，見戈頓入，乃起迎之曰：“有新聞乎？”

戈頓坐定，手搖其篋，低語曰：“祈注視台上，勿視吾。令人疑吾輩作秘密談也。”

於是更低其聲曰：“彼六格蘭姆之物，吾已覓得矣！” (1頁)

インターネット環境があれば誰でもできることなので、大したことではないが、忘れられた作家の忘れられたヒロインを拾い上げ、漢訳二作品の原作を突き止めることができた。また、Arsène Lupinも登場するが、彼の生みの親、Maurice Leblancとは無関係のパステッシュであることも確かめられたわけである。

《亞森羅蘋之勁敵》が原作発表の5か月後に掲載されたのに対し、《竊鏽案》が掲載されたのは2年8か月後で、かなり時間差がある。これは、周瘦鵑 競夫として、恐らく競夫が《亞森羅蘋之勁敵》の掲載を知り、自らの訳の発表を自粛していたものと思われる。競夫は、主として《小説月報》に作品を発表していたが、《禮拜六》にも発表したことがあり*7、《亞森羅蘋之勁敵》の掲載にすぐに気付いたであろう。そこで、自らの訳の発表を2年以上遅らせ、タイトルも原題にしたがってラジウムを前面に出した《竊鏽案》としたのではなかろうか。

著名ではない作家の、雑誌掲載の短篇小説が、二回も翻訳されたのは、“女探偵”・“Arsène Lupin”・“ラジウム”という目立つ特徴が気に入られたからであろう。 □

【注】

1) 『新編増補清末民初小説目録』(樽本照雄

編, 齊魯書社, 2002.4)も、q0407*及q0408* 《竊案》には前掲大塚論文の指摘が取り上げられ、「ルパンのパスティッシュものとみるべき」(大塚秀高)と記載がある(562頁)にもかかわらず、y0043*《亜森羅華之勁敵》には「MAURICE LEBLANC 著。劉樹森は(美)“THE RADIUM ROBBERS”とする。」とある(845頁)だけで、大塚論文の指摘には言及されていない。

- 2) 《小説月報》は東豊書店の影印《小説月報 自創刊號起至廿二卷十二期止》(1979.10)を使用した。影印には奥付が無いので、発行年月日については、前掲『新編増補清末民初小説目録』を引用した。改めて初出の《小説月報》を読んだのは、前掲大塚論文に《清末民初小説書系・偵探巻》について、「問題なのは、翻字の誤りならびに句読の誤りが頻出する点である。しかも、その程度が論外にひどい。」(13頁)とあったからである。
- 3) 『McCLURE'S MAGAZINE』は、Samuel Sidney McClureによってアメリカ・ニューヨーク(?)で1893年に創刊された雑誌。
- 4) 原作には「」の表示は無い。
- 5) 国会図書館所蔵の『McCLURE'S MAGAZINE』に掲載された“Fanny Gordon”作品は以下の5篇である。

『THE STRANGE CAREER OF MISS GORDON The Zibelline Coat』41-6, 1913年10月

『THE QUEEN'S PEARL』42-1, 1913年11月

『THE THREE KNOCKS』42-2, 1913年12月

『THE ORCHID OF SUDDEN DEATH』42-3, 1914年1月

『THE RADIUM ROBBERS』43-3, 1914年7月

ちなみに『扉(ドア)を叩く音』の原作は、『THE THREE KNOCKS』である(但

し、抄訳)。

- 6) 『BREAKING THE TIES THAT BIND Popular Stories of the New Woman, 1915-1930』(Maureen Honey編, University of Oklahoma Press, 1992年)の「A NOTE ON THE WRITERS」336-337頁に拠る。
- 7) 《禮拜六》第21期(中華圖書館1914.10.24)には、競夫《歴史小説 瑪瑙英雄》、同30期(1914.12.26)には、競夫訳《滑稽小説 阿爺》が掲載されている。

【参考文献・ホームページ(HP)】

梁淑安主編《中国文学家大辞典 近代巻》中華書局1997.2

Jeannette L. Gilder 「When “ McClure's ” Began」 『McClure's Magazine』 41-4, 1913年8月

David Reed 『The Popular Magazine in Britain and the United States 1880-1960』 The British Library 1997

John Tebbel, Mary Ellen Zuckerman 『The Magazine in America 1741-1990』 Oxford University Press 1991

荒俣宏 『20世紀 雑誌の黄金時代』 平凡社1998.10.21

William G. Contento 管理 HP 「The FictionMags Index」
<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2007年6月16日確認)

江 中柱 《大公報》中林紵集外文三篇 『文献』 2006年第4期(総第110期) 2006.10.13

董 麗敏 『想像現代性：革新時期的《小説月報》研究』 桂林・広西師範大学出版社2006.8

張 俊才 “悠悠百年，自有能辨之者” 重評林紵及五四新旧思潮之爭 『河北師範大学学報(哲学社会科学版)』 2005年第28卷第4期(総第117期) 2005.7.15

近代翻譯文學家陳鴻璧女士生平考

李 勇

在清末民初的翻譯文學界，活躍着一批優秀的女性譯者。這其中，就包括陳鴻璧女士。

陳鴻璧是近代一位頗有成績的女翻譯家。她的譯作主要是小説，這其中既有個人獨立翻譯的，也有與他人合譯的。她與晚清四大小説雜誌之一的《小説林》關係密切，“是《小説林》雜誌的繼任編輯”^{*1}。她的前三篇譯作全部發表在《小説林》雜誌上，分別是：英國佳漢的科學小説《電冠》，法國加寶爾奧（Emile Gaboriau，今譯加博里奧）的偵探小説《第一百三十案》以及佚名的歷史小説《蘇格蘭獨立記》。除此之外，她還譯過美國葛德爾的《薛蕙霞》（廣智書局、羣益書局、千頃堂1911年同時發行），與張默君合譯過美國白乃傑的《盜面》（廣智書局，1911年）和英國查克的《裴乃傑奇案之一》（廣智書局，1911年）。在近代女性譯者中，譯作可謂豐富。然而，我們“對這位在外國小説翻譯上頗有成績的女性，其生平至今幾乎一無所知”^{*2}，以至於日本學者中村忠行先生曾經懷疑，陳

鴻璧也像周作人早期發表翻譯文學作品時化名為“碧羅女士”一樣，是一位男性譯者的“假藉”^{*3}。數年前，郭延禮先生考出“她是廣東新會人，是近代畫家陳抱一之姊”^{*4}；“婚後（？）住在蘇滬一帶，或丈夫是蘇滬人，據我推測，陳鴻璧當是教會學校畢業的學生，通英文、法文……陳鴻璧的小説譯文雖仍系淺近的文言，但文字通暢、流美，也比較忠實於原著，尤重視原著中的心理描寫，譯文很有特色”^{*5}。

“陳鴻璧辛亥革命後曾任《大漢報》（蘇州）的主筆，《婦女時報》第5期（1912年1月23日出版）上有她的畫像，題為蘇州《大漢報》主筆陳鴻璧女士。她的女友、南社著名女詩人張昭漢（字默君）有詩題云《丁巳（1917）仲春偕陳鴻璧、呂碧城、唐佩蘭諸君探梅鄧尉率賦十三章以志鴻爪》（《婦女時報》第21期，1917年4月）。由以上發現，陳鴻璧確為一位具有革命思想的進步女性”^{*6}。

受郭延禮先生的啓發，按照他提供的“綫索”，我對陳鴻璧女士的生平作了進一步考查。

《上海地方誌·靜安區志》上有這樣一則記載：

陳鴻璧(1884-1966)，女，廣東新會人。上海聖約瑟西童女校畢業。民國元年(1912年)在蘇州《大漢日報》任編輯，後來滬創辦廣東幼稚園。至民國6年發展成小學並附設幼稚園，學生、教職員工達百餘人，改名為旅滬廣東小學。民國9年，新校舍在寶源路落成。民國14年，更名為廣東公學。

民國18年，又定名為私立廣東中小學並附設幼稚園。至民國20年學生已逾700人，校舍5幢。翌年一二八淞滬抗戰爆發，校舍被日軍炸毀。她一面籌畫資金在廢墟上重建校舍；一面租房堅持辦學。經過2年多努力，學生達600余人。上海八一三事變後，新建校舍再度被毀，損失慘重，她又在愛文義路(今北京西路)租屋辦學。^{*7}

根據上面的記載可以得知，除從事翻譯工作外，民國之後，陳鴻璧女士積極投身於創辦學校，學習國外先進的教育理念，如創辦廣東幼稚園以後，她曾“向美伊諾亞函授學校學習幼稚教育課程，兩年畢業”^{*8}。不僅如此，在辦學之餘，她還從事幼稚教育的研究工作，目前所知由她撰寫的專業文獻有兩種，一是《幼稚教育之歷史》，刊於《教育雜誌》19卷2期^{*9}，二是《科學地訓練兒童法》，收錄在商務印書館的《萬有文庫》里。

陳鴻璧女士不僅是一位卓有成效的教育工作者，同時還是民國初年婦女運動的傑出代表。

隨著西方思想的傳入，近代中國婦女的獨立意識開始覺醒，並逐漸衝破家庭和社會的世俗觀念，勇敢承擔起了與男子同樣的救亡圖存任務。武昌起義後，在軍資、軍餉出現不足的情況下，為支援起義軍，婦女們先後成立了各種團體，籌措軍餉，其中最著名的就是上海女界協贊會。這個組織於1911年11月28日在上海愛爾近路紗業公所成立。短時間里，成績顯著，“共募有捐款二萬元，公推張昭漢、陳鴻璧、唐

羣英、程穎四人，到南京謁見孫中山，向他繳納捐款，並請願要求女子將來有參政權，……(孫中山)親自接見徐嶽、徐宗漢、張昭漢、程穎、唐羣英、陳鴻璧、張馥貞、辛素貞等人”^{*10}，並對她們的行動大加贊許。

1912年3月16日，“以聯合五族女界，普及教育，研究法政，振興實業，提倡國貨，養成共和國高尚完全女國民，協助國家進步為宗旨”^{*11}的神州女界協濟社在上海愛爾近路紗業公所成立。它的前身就是上海女界協贊會，協濟社“推舉孫中山夫人、伍廷芳夫人、劉青俠為名譽社長；張昭漢為正社長、楊季威為副社長；教育部長錢新才、程穎；實業部長陳鴻璧、周鑄青；編輯部長唐羣英、湯國梨；評議部長舒蕙楨、張漢英；會計長唐金鈴、梁蕙卿；書記談社英等。事務所設於北四川路9號”^{*12}。

在擔任神州女界協濟社實業部長後，陳鴻璧女士及其它協濟社主要成員拜訪了萬國女子參政會會長美國人嘉德夫人和解古柏斯女博士，向國際婦女運動領袖學習婦女運動的經驗，並於此後“創設女界蓄植試驗所，賃地十畝，種植大豆、黃豆、小麥等，並設畜牧場，養殖羊、鴨、鷄等家畜、家禽”^{*13}。此外，她還創辦愛華公司，“設於上海北四川路，亦是專銷國貨。她們還創制一種愛國女帽，用國產綢料製作，寓意服用國貨以抵制洋貨”^{*14}。

在報刊宣傳方面，“先是張昭漢、陳鴻璧在蘇州創辦《大漢報》”^{*15}，後來，陳鴻璧又在神州女界協濟社的機關報《神州女報》(1912年11月創刊於上海)旬刊第一號

(1912年11月) 旬刊第二號(1912年12月) 上的《光復時代女界活動史》專欄里,發表《蘇州光復之真相》和《蘇州光復之真相續》等文章,宣傳婦女運動,月刊第二號(1913年4月)還刊登了她的照片*16。

為進一步實現女子參政的願望,1912年2月20日,“由唐羣英聯絡張漢英、王昌國、林宗素、陳鴻璧、沈佩貞、吳木蘭、蔡蕙等人發起成立”*17的女子參政同盟會在南京正式成立。這是一個全國性的婦女參政團體,有自己的政綱和事務部。雖然這個團體在袁世凱的專制統治下,被內務部以“法律無允許明文”的罪名勒令解散*18,但它在中國近代婦女運動史上無疑寫下了光輝燦爛的一筆。

通過上面的敘述可以看出,民國成立以後,陳鴻璧女士將主要精力投入到兒童教育事業和婦女運動當中,並取得了相當的成績,無怪乎郭延禮先生說:“可惜的是,這位近代富有才華的女翻譯家,只活動到1911年,辛亥革命之後就沒有再看到她新的譯作”*19。新中國成立以後,陳鴻璧女士仍然擔任著廣東中學校長的職務,她“治校嚴謹,親自巡視環境,深入課堂聽課,抓紀律、文明禮貌,更要求教師為人師表,不允許老師大聲呵斥或體罰學生。1953年,廣東中學與振德中小學合併,改名為培羣中學,教育局仍要聘她為校長。她自感年邁多病,婉謝聘任。但仍十分關心學校的教學工作,校領導有事找其商量,她總是積極出謀獻策。先後有3年時間,教育局通知學校仍按原薪發給,但陳堅持不收,校方只得將此款存入銀行。直至1956年培羣中學與育英中學合併時,經征得陳

同意後,將此存款捐贈給學校,供添置圖書、教具之用”*20。

陳鴻璧女士將自己的後半生獻給了新中國的教育,雖然再也沒有譯作產生,但是却在另一個領域里繼續著自己的事業。其實,在清末民初的文學界,像陳鴻璧女士這樣的女性是很多的。遺憾的是,由於種種原因,我們對她們的生平事蹟知之甚少。在中國近代文學研究日益深入和拓展的今天,對這些女性作家和翻譯家的文學活動進行探討已變得越來越必要和可能,如果這篇小文章能拋磚引玉,引起學界同仁的注意,以推進近代女性文學的進一步研究,則筆者幸甚至焉。 ☐

參考文獻:

- 1) 2) 4) 19) 郭延禮. 中國近代翻譯文學概論[M]. 湖北: 湖北教育出版社, 2005
- 3) 中村忠行. 清末探偵小說史稿(三·完)[J]. 清末小說研究, 1980, (4)
- 5) 郭延禮. 二十世紀第一個二十年近代女性翻譯家羣體的脫穎[J]. 中華讀書報, 2002-5-9
- 6) 郭延禮. 陳鴻璧, 一位被遺忘的女翻譯家[J]. 中華讀書報, 1998-6-17
- 7) 20) 靜安區地方誌編纂委員會. 靜安區志·第三十二編人物·傳略[M]. 上海: 上海社會科學院出版社, 1996
- 8) 9) 1889-1949中國學前兒童教育大事記[J]. 學前教育研究, 2003, (2)
- 10) 12) 13) 14) 15) 17) 劉巨才. 中國近代婦女運動史[M]. 北京: 中國婦女出版社, 1989
- 11) 神州女界協濟社章程[J]. 神州女報, 1912, (4)
- 16) 中國近代期刊篇目匯錄“第三卷下冊”[M]. 上海: 上海人民出版社, 1965-1985
- 18) 徐輝琪. 唐羣英與女子參政同盟會[J]. 貴州社會科學, 1981, (4)

附：陳鴻璧翻譯文學作品目錄

- 1、《印雪簪譯叢》，小説林社1906年版。
- 2、“科學小説”《電冠》，載《小説林》第1-8期，署“(英)佳漢著，女士陳鴻璧譯”。
- 3、“偵探小説”《第一百十三案》，載《小説林》第1-12期，署“(法)加寶爾奧，女士陳鴻璧譯”。
- 4、“歷史小説”《蘇格蘭獨立記》(第十一回起)，載《小説林》第1-12期，署“女士陳鴻璧譯，東海覺我潤詞”。
- 5、“叢錄”《印雪簪簾屑》，載《小説林》第2、6、8、10期，署“陳鴻璧”。
- 6、《西笑林》，載《小説林》第十期，署“印雪簪隨筆”。
- 7、《薛蕙霞》，署“(美)葛德爾著，陳鴻璧譯”，廣智書局、羣益書局、千頃堂1911年同時發行。
- 8、《盜面》，署“(美)白乃傑著，陳鴻璧、張默君合譯”，廣智書局1911年。
- 9、《裴乃傑奇案之一》，署“(英)查克著，陳鴻璧、張默君合譯”，廣智書局1911年。
- 10、《捕鬼奇案》，1912年9月自刊本，廣智書局總代售。
- 11、蘇婉夫人《沈埋受滌》(據郭延禮《二十世紀第一個二十年近代女性翻譯家羣體的脱穎》，載《中華讀書報》2002年5月9日)

- 謝 曉霞 『小説月報』1910-1920：商業、文化与未完成的現代性』上海三聯書店2006.11
- 許 桂亭 「前言」『林紓文選【注釈本】』天津·百花文藝出版社2006.10
- 葛 鉄鷹 『天方書話 縱談阿拉伯文学在中国』北京·首都師範大学出版社2007.3
- 張 俊才 『林紓評伝』北京·中華書局2007.4

中国近代文学研究『留得』第13期(2007.4)
主として『劉鶚集』を特集する。

晚清小説作者掃描(拾貳)

武 禧

(零五七)

怜香惜玉生華卿吳氏

小説創作：《兩緣合記》

怜香惜玉生華卿吳氏：吳華卿，徽州歙縣人，生於清同治光緒間。是一個頗有文化素養的商人(以上材料見諸《中國通俗小説總目提要》。該書評者“吟風弄月生霞安邵氏”未見任何著錄)。

(零五八)

姑蘇桃花館主人唐芸洲

小説創作：《七劍十三俠》

唐芸洲：號桃花館主人，姑蘇人氏。從《七劍十三俠序》中可知其曾師從江文蒲者。光緒二十二年(1897)前創作有《七劍十三俠》一書，光緒二十二年連續完成《七劍十三俠》二、三集。其人及其師江文蒲情況均不詳。

江文蒲作《七劍十三俠序》附后：

序

嘗見稗官小説記載劍仙俠客之流，殊足娛心悅人，羨無已。第類皆雪泥鴻爪，

略見一斑、偶敘一事，如神龍之首見尾隱，令人追想其生平，未必別無驚人之事更有可觀，惜無從考之為憾。友人宏仁堂主人攜來《七劍十三俠》一書，囑余為序。翻閱一過，乃余門人唐生芸洲所紀有明寧藩作亂始末也。其時俞謙、王守仁手下一班豪傑，類飛檐走壁，毅勇絕倫，如昆侖奴、古押衙一流。然卒難奏其全功，當時逆藩之勢焰可知。幸賴衆劍仙相助，始得蕩平巢穴，藩逆成合。其間奇踪異跡，不勝枚舉，源源本本，盡致淋漓，令人色舞眉飛，拍案叫絕，誠集歷來到俠之大觀，稗官之翹楚也。吾知是書一出，其不脛而走也必矣。是為序。

光緒二十二年四月立夏后三日
聽珊江文蒲序並書

(零五九)

半癡生

小說創作：《火燒紅廟演義》

半癡生：不見任何有關記錄。待考。

(零六)

興全劉子式

小說創作：《中東大戰演義》

興全劉子式：根據《中東大戰演義序》可知《中東大戰演義》的作者姓名應為洪興全。阿英在《甲午中日戰爭文學集》中說，洪興全為太平天國干王洪仁玕之子，其后為研究者所延用，如《中國近代文學辭典》即持此說。但筆者未能找到有關阿英此說的證據。又“子式”或解為“洪興全，字子式”，則有可用洪子式稱之。2006年二期《書屋》有陳書良文以為，洪

興全應為李鴻章派系中人物。《中東大戰演義自序》署名洪興全，全文錄於下：

中東大戰演義自序

從來創說者，事貴出乎實，不宜盡出於虛，然實之中虛亦不可無者也。苟事事皆實，則必出乎平庸，無以動詼諧者一時之聽；苟事事皆虛，則必過於誕妄，無以服稽古者之心。是以余之創說也，虛實而兼用焉。至於中日之戰，天粧臺畏敵之羞，劉公島獻船之丑，馬關訂約，臺澎割地，種種事實，若盡將其詳而遍載之，則國人必以我為受敵人之賄，以揚中國之恥；若明知其實，竟舍而不登，則人又或以為我畏官吏之勢，而效金人之緘口。嗚呼！然則創說之實，亦戛戛乎難之矣！至若劉大帥之威，鄧管帶之忠，左夫人之節，宋宮保之勇，生番主之橫，及其所載劉將軍用智取勝，樺山氏譴使詐降等事，余亦不保其必無齊東野人之言。既知其為齊東野人之言者，余也，非讀者也。然事既有聞於前，凡有一點能為中國掩羞者，無論事之是否出於虛，猶欲刊載留存於后，此我國臣民之常情也。故事有時雖出於虛，亦不容不載。余之創是說，實無謬妄之言，虛虛實實，任教稽古者詼諧者互相執博，余亦不問也。謹志數言，以白吾志。

(零六一)

月湖漁隱

小說創作：《野草閑花臭姻緣》

月湖漁隱：未見任何著錄。然有蛛絲螞跡可以探索。1、《七劍十三俠三集》序作者落款為“甬上月湖漁隱”，“閩門祕

術”序作者落款爲“甬上月湖漁隱”，因此可以知月湖漁隱爲寧波人。2、《七劍十三俠二集》序作者用“本局德將桃花館主人……”以書局名義寫序，顯然非書局主人，即書局主要編輯人員。3、月湖漁隱爲《七劍十三俠二集》《七劍十三俠三集》《閨門祕術》作序。能爲三書作序倘非名士大家，即與書局出版業有關聯之人物。4、與月湖漁隱有關的四種書，分由上海書局、滬上書局、申江書局出版。因此可以初步推斷：月湖漁隱是寧波人，居上海，與當時多家書局有關係。當是集小説作者、編輯及書商的人物。將月湖漁隱撰寫的三篇序附后：

七劍十三俠二集序

小説之作不一，或寫牛鬼蛇神之怪狀，或繪花前月下之私情。一種陳腐穢俗之氣，障人心目，蓋作者陳陳相因，而讀者亦厭乎數見不鮮。今於世風頹靡中得幾個俠士，以平世間一切不平事，此雖屬君激之談，而要其俠腸義膽，流露於字里行間，不特令閱者賞心悅目，而廉頑懦立之義，即於是乎在，則有如《七劍十三俠》一書，前集合已風行隸內，幾至家置一編。本局德將桃花館主續集原稿六十回再行校刊，借此以厲風俗，正不厭語之絮聒。吾知是編一出，天下有血性之士，又無不以先睹爲快也。嗚呼·抑強扶弱，大義斯昭，是書也詎特稗官野叟云乎哉？爰樂爲之序。

光緒辛丑正月 月湖漁隱撰並書

七劍十三俠三集序

是書之作籍以抒憤懣者也。前者之有百二十回已詳敘大半。其中繪聲繪色，久已膾炙人口，至於有手不釋卷者。然全豹

未窺，誠不知姦王是何究竟，閱者不免憾焉！桃花館主知閱者之亟求水落石出，復據原史而增撰之。仍得六十回，用以付梓。其筆墨之妙奇，驚人之怪事，尤較之初續兩集，有過之無不及也。

光緒辛丑夏六月中澣

甬上月湖漁隱撰並書。

閨門祕術序

古人有言曰：“牝雞無晨。牝雞司晨，爲家之索。”此專爲婦人女子而言，欲令其克盡婦道也。惜世之人未能盡遵古訓，而又於內則諸篇，不獲悉心詳讀，悟厥義旨，以致悍澆者有矣，嫉妬者有矣，淫賤者有矣。閨門大義日漸澆漓，可勝浩嘆！或者曰：此非有法以處之，不克化其惡習也。自古婦教之書，靡不勝舉，然皆深於理而不深於情，近乎雅而不近乎俗，賢者蕙心蘭質，不難卒讀，加以上承姆教，自能則而效之。若愚者則不然，無怪乎不明大義矣。

於是滬上書局主人有鑑於此，因作閨門祕術小説一部，皆以俗情二字，歷敘賢愚臧否，用佐女史子萬一。庶若輩知所感悟，悍澆者化爲循良，嫉妬者化爲和順，淫邪賤者化爲貞靜，亦閨門中之絕大幸事也。閱者幸毋認爲邪說也可！

光緒辛丑仲春甬上月湖漁隱序



清末小説から

顏 廷亮 新發現の黃世仲小説《義和團》『明清小説研究』2006年第2期（總第80期） 2006発行月日不記

劉 德隆 出房・堂備・寅半生『明清小説研究』2006年第2期（總第80期） 2006発行月日不記